

# 酒食への眼差し

——浦西和彦氏の食文化・味覚雑誌研究

内藤 由直

プロレタリア文化運動や地方の雑誌メディアに関する書誌研究で、文献を総覧することの重要性を示し、幾つもの発見を導いた浦西和彦氏の業績のなかでも、ひととき異彩を放っている

仕事か、『飲食』に纏わる資料の精査・発掘である。浦西和彦・堀部功夫・荒井真理亜編『食文化・味覚雑誌目次総覧』（目次アンシエーツ 二〇一五年）は、その代表的な研究成果である。

『食文化・味覚雑誌目次総覧』では、『酒』（酒の友社 一九五〇年～九七年）や『サッポロ』（日本麦酒 一九五八年～七九年）、『Suntory quarterly』（サントリー広報室 一九七九年～二〇〇九年）とごったいわる『ミニロミ雑誌』や企業の『PR雑誌』を中心に、二〇タイトルに亘る雑誌の記事情報が目録化されている。これらのなかには、流通範囲が地方に限られていたものや、商業雑誌ではないために書店の店頭に並ぶことがなかったものも数多くある。

大手出版社から刊行される文芸雑誌や総合雑誌ではなく、人

目に触れることが限られ、ともすれば読み捨てにされるような雑誌群に浦西氏が注目したのはどうしてなのだろうか。

目録化された記事情報を読んでいると、著名な作家や批評家たちが、飲食関係の雑誌へしばしば寄稿していることに気づく。例えば、名古屋で創刊されたPR誌『あじくりげ』（東海志にせの会 一九五六年～二〇一〇年）は地域の名店を紹介するとてもに食に関する随筆を掲載していたが、その第二三号（一九五八年四月）には、安部公房の「時計の針」というエッセイが収録されている。また、同誌第九〇号（一九六三年一月）には、亀井勝一郎「私とたべもの」という記事もある。あるいは、洋酒の寿屋（現・サントリー）のPR誌であった『洋酒天国』（洋酒天国社 一九五六年～六四年）は、開高健や山口瞳が編集長を務めた雑誌であったが、吉田健一・安岡章太郎・埴谷雄高・いいだもなど著名な文化人が名を連ねている。これらのなかには、文芸雑誌や総合雑誌の目次情報を見ているだけでは気づくこと

のできないものが多数、含まれているのである。

しかし、このような書誌目録は、単に作家たちの逸文を再発見するためだけにあるのではない。重要なのは、文学が存在した「場」そのものなのである。そのことを浦西氏は、次のように述べている。

文学作品が存在して、文学研究がはじめて可能になる。文学者が作品を書きあげ、それが雑誌、新聞に発表される。あるいは単行本として刊行される。そこで我々読者はその作品を読むことが出来る。作品を生み出すのは、その作家の強烈な個性や才能である。しかし、何人といえども、人間生きていくということは、その時代や社会の制約を無意識のうちに受けている。時代や社会には固有のモラルや美意識やもろもろのものが空気のように存在する。文学作品もその時代や社会が生み出した産物であるといってもよい。作品の理解や解釈や評価にとつて、その作品がいつどこに発表されたものかということが、いかなる作家によって執筆されたかということと共に大事なことである。文学作品の理解の前提として、先ず作品の書誌的事実をきちんとする必要がある。書誌的調査が文学研究とは別個のところ、に位置するのではない。文学的研究というものは書誌的などところからはじめねばならない。私にとつて書誌的興味は文学研究そのものについての関心である。

（浦西和彦「書誌について」『日本近代書誌学協会会報』

一九九九年一月）

文学作品は、孤高の作者が世俗から乖離して単独で作り上げたのではなく、それが作り出された時代や社会とともに存る。ゆえに、文学作品は、眼前に現れた文字だけを読めばよいというものではない。作品が生成される場の全体に立ち会うことが作品を理解・解釈する上で不可欠だという浦西氏の考えは、作品が掲載された雑誌の総体を見るところという目次総覧の思想として顕れている。さらに、作品がいつどこで発表されたのかという時空間への眼差しが作者の存在と等しく重要であるとの指摘は、当時の文学研究への戒めであるだけでなく、電子テキストやデータベースの情報氾濫し、特定の情報の一部をピックアップすることが簡便となった現在においてこそ銘記されるべきことであるだろう。

ところで、『食文化・味覚雑誌目次総覧』に採録された記事の執筆者は、著名人ばかりではない。名前を見ても、どこの誰なのか分からない者も多い。署名が名字だけ、あるいはイニシャルだけのものもたくさんある。本書には、二〇の雑誌に執筆した全ての人物を横断的に検索できるようにした「執筆者名索引」が巻末に掲載されているが、これを眺めていると、実に多くの、そして様々な人々が食文化の言説に関わっていることが見て取れるのである。

知名度の低い執筆者、あるいは無名・匿名の人々をも一律に拾い上げる視点には、本書に記されているように、「この細目によって、食味雑誌が、その時代の食生活や食文化、あるいは社会や文学や歴史や風俗を知る上で無視できない豊饒な内容を持つていることが明らかになるであろう」（浦西和彦・堀部功夫・荒井真理亜「はしがき」『食文化・味覚雑誌目次総覧』前掲）という確信が反映されている。市井に生きる名も無き諸人の言葉こそが、我々の社会や文化の基盤なのであり、人々の生活を多様で豊かなものにしていくのだ。

そうしたマイナーな人々の存在や言説への関心は、浦西氏が専門としたプロレタリア文学運動への関心と共通するものがある。榎沢健が述べるように、「プロレタリア文学は、少数の専門家や職業作家によってだけでなく、誰もが読み手であると同時に書き手になることを追及した文学運動」『だからプロレタリア文学』勉強出版（二〇一〇年）であり、「無名性」「小ささ」「取るに足らなさ」「存在の透明性」を「集団」の力によって克服し、乗りこえていこうとした文学運動」（同前）であった。プロレタリア文学のなかの些末な作品群と同様に、食味雑誌の誰が書いたか分からない、取るに足らない記事には、それだけでは高い価値を見出せないものもあるかも知れない。だが、それら一つ一つが集合して、一冊の雑誌の誌面を彩り、雑誌のシリーズを作り上げ、文学が存立する場を形成しているのである。そうしたエフェメラルなものへの興味関心が、対象を総体のなかで

見た時に看取される豊饒さを、浦西氏に気づかせたのであろう。エフェメラルといえば、無名の人々に劣らず、著名な作家たちも、食味雑誌の数々に、その場限りの消費で霧散してしまうような文章をしばしば執筆している。宴席でのたわいもない話や食の嗜好など、瑣末な事柄について書かれたものも多いが、まとめて読むとこれが面白いのだ。

作家たちの食や酒に関する放談を蒐集したものととして、浦西氏が編集したアンソロジーがある。浦西和彦編『酒』と作家たち』（中央公論新社 二〇一二年）・同『私の酒——『酒』と作家たちⅡ』（中央公論新社 二〇一六年）・同『文士の食卓』（中央公論新社 二〇一八年）がそれである。

『酒』と作家たち』は、佐々木久子が長らく編集長を務め、火野葦平の助力を得ながら刊行されていた雑誌『酒』（前掲）に掲載された、作家・批評家・研究者たちの随筆を収録したものである。荒正人や大岡昇平、川村二郎や原卓也など総勢三十七名による、酒に纏わるエッセイが選ばれ集められているが、それらはいずれも酒を通じた作家たちの交友や、小説などの作品からは決して知り得ないようなエピソードに溢れている。例えば、奥野健男が高見順について書いた「高見順の思い出」（『酒』と作家たち』前掲）には、酒好きの高見順が銀座のクラブでホステスに向かって（本稿には引用できない）下ネタを披露している会話や、安酒場で石川淳が怒鳴り散らしているのを見ていた高見がそれを冷静に分析している様子などが書き留められていて

面白い。あるいは、大隅秀夫は「君たちは一軍半」(『酒』と作家たち『前掲』)というエッセイのなかで、大宅壮一が下戸であることを記しているが、大宅が僅かな酒の混ざった酢飯で作られた押し寿司を食べて酔っ払っていたことが描かれている。さらに、初めて訪れたスタンド・バーで周りがみなビールやウィスキーを注文するなか、大宅一人が「ミルクセーキ」をオーダーし、バーのママさんが驚いて、ミルクセーキの材料を買いに出掛けていく様子が描かれていて可笑しさが込み上げてくる。

続編として刊行された『私の酒——『酒』と作家たちⅡ』は、同じく雑誌『酒』に掲載された四九篇のエッセイ集である。このなかでは、酒乱のため「だれもぼくと一緒に酒を飲んでほくれない」と愚痴る野坂昭如「男と女が酒を飲むとき」(『私の酒——『酒』と作家たちⅡ』前掲)も滑稽だが、傑作なのが梅崎春生「眼の上の傷」(『私の酒——『酒』と作家たちⅡ』前掲)である。終戦間際、鹿児島島の海軍基地で深夜、酒に酔った梅崎は崖から転落・失神したことがあるらしい。負傷しながらも起き上がって歩き出した後に転んだ時、「面倒くさいからそのまま眠ろう」としたというのが吹き出さずにはいられない。なんとか宿屋へ辿り着いて蒲団で眠り、起きて鏡を見れば、顔全体が血の瘡蓋に蔽われており、ひどく驚いたそうである。私もかつて、酔っぱらって寝た後に鼻血が噴き出したことがあるのだが、面倒くさいのでそのまま眠り続け、翌朝、殺人事件現場に横たわっているような有様を家族に発見されたことがあり、梅崎にはとても親近

感が湧いた。

浦西氏は本書の解説で、「酒について語ることは自己の青春を語ることもである」(解説——時代色に生彩を放つ)『私の酒——『酒』と作家たちⅡ』前掲)と述べている。明日のことを考えずに酒が飲めるのは、青春時代の特権であるだろう。酒の味とともに、ほろ酔い気分で友人たちと止めどなくしゃべり続けた享樂や、失敗の数々は、時代や場所の違いを越えて、また立場を超えて、酔いどれたちが共有できる若き日の幸福の感覚である。

最後の『文士の食卓』は、『あまカラ』(甘辛社 一九五二年、六八年)などの雑誌等から選りすぐった、作家たちの食に関するエピソードを集めたものである。室生犀星や泉鏡花、坂口安吾や太宰治といった名立たる作家たちの食卓模様を共通テーマとして、家族や親しい友人らが垣間見た文士たちの逸話が収録されている。危篤に陥った夏目漱石の最後の言葉が「何か食いたい」であったことを記す夏目伸六「一匙の葡萄酒」(『文士の食卓』前掲)や、芥川龍之介のお汁粉好きについて書かれた小島政二郎「食いしん坊」(『文士の食卓』前掲)など、文学者たちの飽くなき食欲がありありと描かれていて興味深い。

浦西氏は、『文士の食卓』の編集作業中であった二〇一七年一月一六日に逝去された。本書の解説を書くことも叶わず、完成を見ることもできなかった。生涯で最後に取り組んだ仕事の一つであったともいえる酒食と文学の関わりへの探求について、我々はどのように評価できるだろうか。

その意義の一つは、食味雑誌の書誌研究や、文学者たちの食や酒に纏わるアンソロジーの編集によって、文学研究の裾野の広さを後学に知らしめたことである。真銅正宏『食通小説の記号学』（双文社出版 二〇〇七年）が詳述するように、文学と飲食の関係は実に深い。だが、文学研究において、酒食のテーマは周縁に配置され、中心的な課題となることは稀であった。浦西氏が残した成果は、そうした現下の文学研究の空隙を埋める意味を持つものであり、人々の食や味覚の考察を通して、文学が置かれた場の様相をより鮮明にしていくための基礎研究として我々の目の前にある。

もう一つ大きな意義として考えられるのが、文学研究者ではない人々に、酒食を通して、文学という領域が存在することを知らしめたことである。『食文化・味覚雑誌目次総覧』を図書館で探そうとすると、本書は日本十進分類法（NDC）で分類される文学（9類）ではなく、多くの図書館で衣住食の習俗（3類）か衛生学（4類）、あるいは食品・料理（5類）に関する参考書として請求番号が付与され、我々が普段、文学の文献情報を調べに行く場所とは異なる棚に配架されていることが分かる。つまり本書は、文学研究者よりも、民俗学や家政学を学ぶ人たちの目に触れる機会の方が多いと考えられるのである。本書を手取る者は、これを文学研究のための参考書とは考えずに利用しているかも知れない。

翻って考えてみれば、私は自身が文学を研究しているために、

これを文学研究のための参考書だと思いついていただけなのである。酒食や味覚に関する雑誌群が、文学研究のためだけにしか役立たないなどということはあり得ない。食べることや飲むことは、生活や文化そのものであり、往事の風俗や社会を知る上で重要な手掛かりとなるものである。文化研究や社会科学の側から飲食の問題を検証しようとした際、種々の雑誌やアンソロジーに残された文学者たちの妙々たる随想は、有用な情報源となるはずである。

※ ※ ※

以下は個人的な回想であるため、浦西先生と書く。

私が浦西和彦先生と酒食を一緒にしたのは数えるほどで、いずれも学会や研究会の打ち合わせ・懇親会の席であった。お酒を召し上がった浦西先生は、少し顔を赤らめ、普段より心持ち饒舌になって、文学研究や大学のことについて語っておられた。特に印象に残っている酒席は、二〇〇八年九月二五日のことで、場所は居酒屋チェーン店の酔心京都駅前B1店であった。日付と場所を記憶しているのは、ここで日本近代文学会関西支部の企画委員会を開催し、浦西先生に初めてお目にかかったからである。出席者は、浦西先生と木村一信先生、そして三谷憲正先生と私の四人であった。

これは、日本近代文学会関西支部と韓国日本近代文学会が共

同企画した「海を越えた文学（1）——日韓を軸として——」を実現するために、木村先生と私で、浦西先生と三谷先生にご助力をお願いするために集まったものであった。当時、ポスドクであった私は末席に坐して、企画の実施に向けた相談はもちろん、浦西先生はじめ諸先生方がお酒の勢いで思わず口を滑らせる愉快な話を楽しく聞き入っていた。

席上、海外の学会との交流のためにご協力をお願いしたいと申し上げた時、浦西先生は「そういうのはこれからどんどんやっていくべきや」と直ちに賛意を示され、学会の開催会場を探しているという私の話にも即答で、「関西大学でやったらええ」と仰った。私は関西大学の他の先生方の顔を思い浮かべながらも、酒の勢いもあつたのか、たいへん心地よい浦西先生の決断の早さにうれしくなったのを覚えている。その後もこれからの学会の在り方や研究の現状について話は尽きなかったが、具体的な内容は酔いも回って臆気にしか覚えていない。確かなのは、浦西先生は常に今後のことを考えていたということである。

浦西先生は、将来の研究のために多くの種を蒔いた。そのなかでも、確かな事実を調べ上げた成果は、幾つもの書誌研究の業績として我々の手元に残されている。中野重治は、浦西先生の研究姿勢に言及して、「浦西自身の、あくまで面倒な、正確を期して自分の時間と足とでした事実調査の結果を具体的にさしだすこと」について、「事実しらべ」というのは「こうもありがたい」と高く評価した（中野重治「緊急順不同 事実しらべの必要のこと」

『中野重治全集第二十四卷』筑摩書房 一九九八年、初出は『新日本文学』一九七七年六月）。浦西先生が膨大な手間と時間をかけてまとめ上げた事実はどう向き合い、いかに活用していくか。それは、我々自身のこれからの研究によって応えていかなければならないことである。